『声の相性と身体の相性〜オフ会で出会った彼に流されちゃった話〜』

「「カンパーイ!!」」

音声SNSが流行って、早3か月。私、彩(サヤ)は毎週そのSNSで集まっていたメンバーとのオフ会に来ている。レンタルルームの広いマンションを昼から借りて、絶賛どんちゃん騒ぎ中だ。

「さやちゃん、飲みすぎてない?」

「大丈夫だよ!てか長瀬こそ大丈夫?さっきテキーラ飲まされてたよね?」

「いや、マジきつかった(笑)」

うえっという変顔をして笑う彼は長瀬。このグループの中心メンバー。人懐っこいタレ目の犬系男子っぽい顔をしている。

「やっぱみんな声聞いてたから、初対面なのに全然そんな感じしないね。」

「たしかにね。俺はイメージ通りだった?」

「トプ画見てるしイメージ通り!でも、思ってるより背が高くてびっくりした!」

(・・・というか、声もハスキーでめちゃ好きだったのに、トプ画以上にタイプの顔でかっこよくてびっくりしてます!!! ・・・なんて言えない・・・///)

「ありがとうございました〜〜」

「荷物持ってくれてありがとう！」

「いいよ、任せて」

生温い夜風が肌をかすめていく。街頭の明かりで照らされている長瀬の横顔。鼻筋きれいだなーと、ついぼーっと見つめる。

「ん？どした？」

「あ！いや、なんでもない！早くもどろっか！」

どきどきする…早く戻ろうと思って、歩くペースを速めようとすると、ぎゅっと手を握られビクッと反応してしまった。

「ゆっくり行こ？転ぶよ。」

「え、あ・・うん。」

たった三分、もうマンションは目の前なのに手が・・・

「もうついちゃったか。さやちゃん、こっち。」

「え？！」

駐車場の方に引っ張られて、そのまま壁際に追いやられる。

というか・・・距離が近いっ//
「さやちゃん、顔赤いね。酔った？」
そう言って長瀬は私の頬をそっとなでる。もうこの現状に頭が追い付かなくて、言葉が何も出ない。
「それとも、、緊張してる？」
ぶんぶんと大きくうなずき肯定の意を示す。
「やっぱかわいいね・・・」
長瀬の手が背中から腰へとゆっくり降りてきて、むず痒い感覚に襲われる。
そのまま、ゆっくりと抱き寄せられた。身体が密着して、長瀬のにおいに包まれる・・・。
立ったまま抱き合うと密着感がすごくて、長瀬の身体つきの良さを嫌でも感じてしまう。
「な、、ながせ、、」
なんでこんなことを？という意味で長瀬を見上げると、腰にあった手が私の後頭部に添えられて、
そのタレ目をすっと細めてキスをした
ちゅっ…　とちいさなリップ音がして恥ずかしくなる。まだ顔は近いままで、無言の時間が流れる。
そして、長瀬はまた目を閉じた。私もこの雰囲気に呑まれてしまって、私から唇を重ねた。そうすると、後頭部にあった手がさらに強くなり、舌を絡ませあう。くちゅ、、と水音がし、お互いの唾液を絡めあった。家から聞こえるメンバーの笑い声の中、ちゅっ・・・ちゅ・・・くちゅ・・・とリップ

「ありがとー！ばいば～い！」
そういってオフ会も終わり、各自解散。するとスマホにメッセージが一件。人に囲まれている長瀬からだった。
『さっきのコンビニで待ってて』
ダメなのに・・・胸の高鳴りが止まらなかった。

＊＊＊＊＊

「はぁ・・・はぁ・・・ん・・・っ」
コンビニで再会した後そのまますぐ近くのラブホテルの部屋に入って、深いキスを重ねる。
「な・・ながせ・・・ふ・・・ぁ・・・♡」
「やっぱ・・・さやちゃんの顔エロ・・・」
荷物をその辺に散らかし、ベッドに押し倒された。
「今日会った時から、絶対さやちゃんとエッチしたいって思ってたんだよね。」
「・・・変態。」
「嫌いじゃないでしょ？」

ふんっと首を横に向けると、その顔をグッと戻されておでこにキスを落とす。
「そんなこと言って良いんだ？」

＊＊＊＊＊＊
ブブブブブブブブブブブブ
「ムリっ♡ああっ♡・・・っううう♡だめ、だめ♡またイク・・・！♡♡♡」
ビクッっと跳ねる身体、ラブホのバイブをクリに押し当てられて、もう３回も絶頂に達しているのにやめてくれない。
「ダメっ♡連続で・・・イッてるの！！♡あああああっ♡止めて！止めて！」
そんな懇願も虚しくがっしりとした身体で快感から逃げられないように腰を押さえられてしまう。
「はっ・・・♡あっ・・・！♡ん〝んんっ♡♡ なんか・・・なんかきちゃう・・・っ♡あ〝あっ♡漏らしちゃう！止めて・・・！」
「大丈夫。そのままイって」
「〜〜〜〜っ♡う〝う〝っ♡ ああああああっっっ♡♡」
プシャっとシーツにシミができ、目の前がチカチカして何が起こったのか分からなかった。
「さやちゃん潮吹いちゃたね。えらいねぇ。」

「はっ♡・・・うっ♡・・んんんぅ♡」
ゆっくり舐められるからか、余計に神経がクリに集中して、舌のざらざらした感覚も柔らかい唇も鮮明に分かってしまう。
「ああっ♡・・はっ♡・・んぁ・・・きもちいい♡♡」
「ははっ　これすき？」
「すきぃ・・・♡ あっ・・・んんんっ♡」
さっきのバイブとは打って変わって優しいのにゆっくりとした重い刺激。
「あっ・・・あっ・・ッ♡♡い・・イキそ・・う♡ああっ♡」
段々と足が小刻みに震えてて、刺激が重くゆっくりと登ってくる。
すると長瀬の指が中に入ってきて、Ｇスポットをグッと強くグリグリと押されて
一気にナカが締まって快感が奥を貫いた。
「ああっ♡・・・ああっ♡あっ♡い・・・イクぅうぅッ♡♡」
ずくんッッ、と余韻の大きい絶頂を迎え、子宮がぎゅっーーっとなるのが分かった。
「は・・・はぁ・・・やば♡」
「気持ちよかった？」
「///。すごい///」

挿れてからキスしてる間に馴染んだからか、ナカが長瀬の形を覚えちゃってて
出し入れされるたびに良い所をゴリゴリと引っかいてゆく。
「あっ、あっ♡あっ♡す、すご、、♡きもち、、♡♡」
「、、はぁ、、俺も。」
———ぐちゅっぐちゅっ——パンパンパンパンっ———
すでに何度も達してるのでいやらしい水音が突かれるたびに響く
「ああっ・・・うぅっ♡は、あっ・・・っあぁ♡」
気持ちイイ気持ちイイ気持ちイイ気持ちイイ・・・なんて甘くて激しい快感なんだろう
「はは、顔やば、可愛い。」
「っ//み・・見ないで//」
「だーめ、隠さないで。」
長瀬に両手首をベットに押さえつけられ、顔を隠せない状態に。
しかも体勢的にさっきとりも体重が乗ってより奥を熱いソレがガンガンと快感を与えてくる。
「あっ!♡ああっ♡ ～～ぅう ぅっ♡♡」
自分のナカが長瀬のソレに媚びてぎゅうぎゅうと締め付けていくのを感じる。
「っ♡♡ああああっ・・・あっ♡あっ♡あっ♡あっダメ//ああっダメダメっ//」